

著者紹介（掲載順）

梁川英俊（やながわ・ひでとし／総論・第4章・第6章）

1959年生まれ。東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程中退。現在、鹿児島大学法文学部教授。主要業績に“Merlin dans l’imaginaire breton depuis le XIXe siècle” (*IRIS*, Centre de recherche sur l’imaginaire - Université Grenoble 3, 2001)、「ブルターニュにおけるナショナルリズムの誕生——『バルザド・プレイス』以前のラヴィルマルケ」(一)～(四) (鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第54号～第57号, 2001～2003年)、「ラヴィルマルケとリュウゼル——いわゆる「バルザド・プレイス論争」について」(一)～(八) (鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第57号, 第59号, 第60号, 第62号, 第64号, 第65号, 第66号, 第70号, 2003～2009年)、“La Bretagne et les minorités japonaises sont-elles comparables?” (*Identités et société de Plougastel à Okinawa*, Presses Universitaires de Rennes, 2007)、『*辺境*』の文化力——ケルトに学ぶ地域文化振興 (編著、鹿児島大学法文学部人文学科, 2011年)、『歌は地域を救えるか——伝統歌謡の継承と地域の創造』(編著、鹿児島大学法文学部人文学科, 2013年)、『唄者築地俊造自伝——楽しき哉、島唄人生』(共著、南方新社, 2017年)、『島の声、島の歌』(編著、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター, 2019年)、『奄美島唄入門』(北斗書房, 2020年)、『「かずみ」の時代』(南方新社, 2023年)など。

疋田隆康（ひきだ・たかやす／第1章）

1977年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。現在、京都女子大学等非常勤講師。主要業績に「古代ガリア社会におけるケルトの伝統」(『*史林*』86巻第4号, 2003年)、「アイルランドにおける古典の伝承とケルト・イメージ」(京都アイルランド語研究会編『今を生きるケルト——アイルランドの言語と文学』英宝社, 2007年)、「古代イベリア半島のケルト・アイデンティティ」(『*西洋古代史研究*』第7号, 2007年)、「イメージ分析に基づく古代ケルトの貨幣画像資料の研究」(『*鹿島美術研究*』第34号, 2017年)、「痛みをめぐる古代ケルト人の民間信仰と医療」(南川高志・井上文則編『生き方と感情の歴史学——古代ギリシア・ローマ世界の深層を求めて』山川出版社, 2021年)、『ケルトの世界——神話と歴史のあいだ』(ちくま新書, 2022年)など。

林 邦彦（はやし・くにひこ／第2章）

1974年生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。現在、尚美学園大学芸術情報学部講師。主要業績に「*Saga af Tristram ok Ísodd*における女性達」(中央大学人文科学研究科『*人文研紀要*』第84号, 2016年)、『*ブリタニア列王史*』のアイスランド語翻案『*ブリ*

トン人のサガ』の二ヴァージョン」(渡邊浩司編著『*アーサー王伝説研究——中世から現代まで*』, 中央大学人文科学研究科研究叢書71, 中央大学出版部, 2019年)、「*北欧のランスロット物語?*——『*美丈夫サムソンのサガ*』再考」(『*尚美学園大学芸術情報研究*』第32号, 2020年)、「*トリスタン物語を扱ったフェロー語バラッド『トウイストラムのバラッド』試論*」(菊池清明・岡本広毅編『*中世英語英文学研究の多様性とその展望——吉野利弘先生 山内一芳先生 喜寿記念論文集*』春風社, 2020年)、『*フェロー諸島のアーサー王物語——バラッド「ヘリントの息子ウィヴァント」をめぐる*』文化書房博文社, 2022年)など。

辺見葉子（へんみ・ようこ／第3章）

カリフォルニア大学ロサンゼルス校大学院フォークロア & 神話学プログラム修士号、慶應義塾大学文学研究科英米文学専攻博士課程中退。現在、慶應義塾大学文学部教授。主要業績に『*領主と奥方のレー*』(翻訳)・「*プロセリアンドの森の伝承——トルキンのブルトン・レー——その背景と典拠*」(解説) (『*ユリイカ*』特集: トールキン生誕百年——モダン・ファンタジーの王国, 青土社, 1992年)、『*航海譚*』(翻訳)・「*西方の楽園への航海者たち*」(解説) (『*ユリイカ*』2002年4月臨時増刊号, 総特集: 『*指輪物語*』の世界——ファンタジーの可能性, 青土社)、「*妖精信仰と魔女裁判*」(安田喜憲編『*魔女の文明史*』八坂書房, 2004年)、「*エヘドの娘の「恋」——中世アイルランドの文脈*」(柴田陽弘編著『*恋の研究*』慶應義塾大学出版会, 2005年)、「*竖琴弾きと呪詛的な眠り——中世アイルランド*」(吉田敦彦監修『*比較神話学の鳥瞰図*』大和書房, 2005年)、「*プロセリアンド巡礼——「魔法の森」とケルティシズム*」(松田隆美他編著『*中世主義を超えて——イギリス中世の発明と受容*』(慶應義塾大学出版会, 2009年)、“*Tolkien’s The Lord of the Rings and His Concept of Native Language. Sindarin and British-Welsh*” (*Tolkien Studies* 7, 2010)、“*The Marvels of the Forest of Brocéliande in a Colonial Context: Chrétien de Troyes and Wace*” (F. Vigneron & K. Watanabe ed., *Voix des Mythes, Science des Civilisations*, Peter Lang, 2012)、「*アーサー王物語と J. R. R. Tolkien——アヴァロンとエレッセア*」(中央大学人文科学研究科編『*アーサー王物語研究——源流から現代まで*』中央大学人文科学研究科研究叢書62, 中央大学出版部, 2016年)、「*トルキンとブリティッシュ/ケルティック*」(『*ユリイカ*』2023年11月臨時増刊号, 総特集: J. R. R. トールキン——没後50年——異世界ファンタジーの帰還, 青土社)など。

森野聡子（もりの・さとこ／第5章）

ユニヴァーシティ・コレッジ・オブ・ウェールズ、アバリストウイス (現アバリストウイス大学) 大学院博士課程ウェールズ語科修了。ウェールズ大学・学術博士 (ケルト学)。国立大学法人静岡大学名誉教授。主要業績に“The Journey across the Wilderness—Structural Analysis of the Three Welsh Arthurian Romances” (1) (2) (*Studia Celtica Japonica*, The Celtic Society of Japan, Nos. 6-7, 1994, 1995)、“*The sense of ending in the Four Branches of the Mabinogi*” (*Zeitschrift für celtische Philologie*, Band 49-50, Niemeyer, 1997)、『*ビクチャレスク・ウェールズの創造と変容——19世紀ウェールズの観光言説と詩に表象される民族的イメージの考察*』(共著、青山社、

2007年)、「『ブルー・ブックスの陰謀』がウェールズの文化的ナショナリズムに与えた影響」(『ケルティック・フォーラム』第15号、2015年)、「ウェールズ伝承文学におけるアーサー物語の位置づけ」(中央大学人文科学研究所編『アーサー王物語研究——源流から現代まで』、中央大学人文科学研究所研究叢書62、中央大学出版部、2016年)、『ケルト文化事典』(木村正俊・松村賢一編、東京堂出版、2017年)、「ダーウィン以前のブリテンにおける「ケルト人種論」についての考察——スコットランド・ゲルマン起源論争を読み直す」(『ケルティック・フォーラム』第21号、2018年)、『ウェールズを知るための60章』(吉賀憲夫編著、明石書店、2019年)、『ウェールズ語原典訳マビノギオン』(編・翻訳・解説、原書房、2019年)、“‘llyma dechreu mabinogi’: The Mabinogion from the Antiquarian Metropolitan to the Industrial Merthyr” (*Celtic Forum*, No.23, 2021) など。

不破有理 (ふわ・ゆり／第7章)

慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻博士課程満期単位取得退学・北ウェールズ大学(現バンガー大学) 修士号(アーサー王伝説課程)。現在、慶應義塾大学名誉教授。主要業績に「ウェールズの洪水伝承」(篠田知和基・丸山顯徳編『世界の洪水神話——海に浮かぶ文明』勉誠出版、2003年)、「負の英雄の誕生——アーサー王の息子・甥モードレッド」(『アジア遊学』87、特集：古今東西のおさな神、勉誠出版、2006年)、「紅いドラゴンの行方——ウェールズ伝承およびアーサー王年代記におけるドラゴンの表象」(『慶應義塾大学日吉紀要英語英米文学』52、2008年)、「運命の車輪は止まれるか——ソートン写本における中英語作品『アーサーのワズリン湖奇譚』再考」(松田隆美・原田範行・高橋勇編著『中世主義を超えて——イギリス中世の発明と受容』慶應義塾出版会、2011年)、『ケルト文化事典』(木村正俊・松村賢一編、東京堂出版、2016年)、“Paving the Way for the Arthurian Revival - William Caxton and Sir Thomas Malory’s King Arthur in the Eighteenth Century” (*Journal of the International Arthurian Society* 5.1, 2017)、“Making Malory ‘readable’ in the Victorian period: Frederick James Furnivall and Sir Edward Strachey” (*POETICA: An International Journal of Linguistic-Literary Studies* 95 & 96, 2021)、“Curtana, ‘Monjoie’ to Clarente?: Notes on the Sword of Mordred in the alliterative *Morte Arthure*” («*Si est tens a fester*» *Hommage à Philippe Walter*, Etudes réunies par Kôji Watanabe (CEMT Editions, 2022)、『「アーサー王物語」に憑かれた人々——19世紀英国の印刷出版文化と読者』(慶應義塾大学教養研究センター選書、慶應義塾大学出版会、2023年) など。

鈴木曉世 (すずき・あきよ／第8章)

1977年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。現在、大阪大学大学院人文科学研究科人文専攻准教授。主要業績に『越境する想像力——日本近代文学とアイルランド』(大阪大学出版会、2014年)、『文学 海を渡る——越境と変容』の新展開』(共著、三弥井書店、2016年)、「日本文学の翻訳に求められたもの——グレン・ショー翻訳、菊池寛戯曲の流通・書評・上演をめぐる」(河野至恩・村井則子編『日本文学の翻訳と流通』勉誠出版、2018年)、「郡虎彦『義朝記』(*The Tails of Yoshitomo*) 成立の背景——演劇、プロパガンダ、女

性参政権運動」(『日本文学』68巻11号、2019年)、「戦間・戦時期日本におけるアイルランド文学の受容とナショナリズム——農民文学運動と W. B. イェイツ表象の変容」(『待兼山論叢』54輯、2021年)、“The reception of Irish literature and the image of ‘Celts’ in modern Japan: Lafcadio Hearn’s writings and ‘national characteristics’” (John FitzGerald, Richard J. Kelly, Claire Connolly and Hiroyasu Fujisawa ed., *Ireland-Japan Connections and Crossings*, Cork University Press, 2022) など。

小池剛史 (こいけ・たけし／第9章)

1970年生まれ。エジンバラ大学哲学・心理学・言語科学学部英語学科博士課程修了。現在、大東文化大学文学部准教授。「外国語としてのカムライグ語学習における、綴り字通りの発音」(『ケルティック・フォーラム』第12号、2009年)、『ウェールズ語の基本——入門から会話まで』(共著、三修社、2011年)、ジャネット・デイヴィス『ウェールズ語の歴史』(翻訳、春風社、2018年)、「‘Welsh-Ale’に見るアングル人とブリトン人の融合社会——『ピーターバラ修道院長チェオルレッドとウルフレッドの同意書』における用例の検証」(菊池清明・岡本公毅編著『中世英語英文学研究の多様性とその展望』春風社、2020年)。